

第二百六十一話 踏みにじられた大和撫子の使命感

日ソ中立条約に違反して、ソ連軍は8月9日対日侵攻（参戦）し、8月11日からは樺太にも侵攻が開始された。樺太には当時40万人ほどが居住していた。ソ連軍の樺太侵攻では、「真岡郵便電信局事件」と「太平炭坑病院看護婦事件」の痛ましい事件がおき、大和撫子かが犠牲になった。今に続くソ連（ロシア）の蛮行を改めて認識し、強く非難したい。

1 真岡郵便電信局事件

(1) 事件の経緯

ソ連軍の侵攻に対処すべく樺太島民の緊急疎開が計画され、13日から開始された。真岡郵便局長は、指示に基づき、女子吏員に対し緊急疎開命令を通知した。これに対し、電話交換業務に任ずる女子全員が、



九人の乙女の碑

樺太太平炭坑病院殉職看護婦慰霊碑

局に留まることを熱望するも、最終的には残留交換手20名が決定された。

19日から非常体制となり、20日早朝ソ連軍は真岡に上陸、無差別攻撃を加えた。その日の朝、夜勤交換手11名、他に職員7名が勤務していた。

艦砲射撃により、真岡郵便局も被弾し、孤立した交換手は青酸カリ又はモルヒネで自決した。殉職者9名、生存者3名となった。

(2) 郵便局の業務再開

事件から一ヶ月、進駐軍命令で業務再開した。元の局員とソ連の局員も配置された。

(3) 慰霊碑の建立と碑文 稚内公園

碑文には当初、「・・・日本軍の命ずるままに・・・」と刻まれていたが、軍命令がなかったことが明らかにされ、叙勲の動きもあり書き換えられた。勲八等宝冠章を受章し、靖国神社に合祀されている。（合掌）

2 太平炭坑病院看護婦の集団自決

(1) 事件の経緯

8月16日、ソ連軍は南樺太の塔路に上陸、逃げ惑う住民に容赦なく機銃掃射を浴びせた。南樺太第二の都市である恵須取町も、低空飛行のソ連戦闘機の機銃掃射、上陸兵による機銃掃射、艦砲射撃を受け、正に地獄絵図だった。殆どの住民が避難する中、恵須取町太平炭坑病院の看護婦23名は、8名の重傷者と共に病院に留まった。彼女等の看護精神・使命感が留まらせたのだ。が、重傷者達から自分等にかまわず早く避難してくれとの懇願に後ろ髪を引かれる想いで病院を後にした。

(2) 自決

ソ連兵が間近に迫っている、退路は断たれたとの情報を得て、婦長は、「年頃の娘を綺麗な体で帰せないなら死を選ぶしかない」と覚悟を決めた。「君が代」「山桜の歌」を唱和して劇薬を呑んだり、手術用のメスで手首を切った。婦長はじめ6名がなくなり、17名は辛くも命は取り留めた。生存者たちの生き残ったことに対する悔悟はその後の人生でも決して忘れられることなく、最後まで彼女たちを苦しめたことは想像に難くない。

(3) 慰霊碑

札幌護国神社の境内 （合掌）

3 彼の国は何故に未だに戦争犯罪に手を染めるのか？

今では死語ともなった感があり、セクハラと非難されかもしれぬが、“大和撫子”の使命感・献身に感嘆する一方、彼の国の暴虐に怒りを覚える。彼の国の体質は昔も今も依然として変わっていないと断じうる。

(了)